

巻頭言

〈小特集 4〉

『アメリカ批判理論：新自由主義への応答』を読む

Special Issue 4:

Reading *Critical Theory in America: Responses to Neoliberalism*

この小特集は、『アメリカ批判理論——新自由主義への応答』（晃洋書房、2021年）の出版を記念して、2021年9月25日 Zoom ミーティングにて、立命館大学・間文化現象学研究センター主催で開催されたシンポジウム『『アメリカ批判理論：新自由主義への応答』を読む』にもとづくものである。この小特集では、日暮の巻頭言、青柳の論文、百木の論文の三本を掲載する。この小特集は、本書を手がかりに、アメリカ批判理論の方向性を再考し、フランクフルト学派とフェミニズム、ポストモダン派等の交錯の可能性を探ろうとするものである。したがって、本書の概要をまず紹介したい¹⁾。

本書は、M. ジェイと日暮が共編したアンソロジーである。したがって本書自体がオリジナルであり、日本独自に編まれた著作である。その特徴を何点か指摘しておく。

第一に、ジェイ（カリフォルニア大学バークレー校歴史学部教授）は、国際的にフランクフルト学派の批判理論を中心とした思想史研究、文化批評、ポストモダン思想研究で知られている。時事問題に対する政治的コメントも多く、アメリカ西海岸を代表するリベラルの論客と言えよう。著書は、『弁証法的想像力』（荒川幾男訳、みすず書房、1975年）、『マルクス主義と全体性』（荒川幾男他訳、国文社、1993年）、『うつむく眼』（亀井大輔他訳、法政大学出版局、2017年）、『日蝕後の理性』（未邦訳、*Reason after Its Eclipse: On Late Critical Theory*, The University of Wisconsin Press, 2016）等多数ある²⁾。

第二に、日本には、ジェイが独自に編集した批判理論の著作がすでに二点

ある。竹内真澄監訳『ハーバーマスとアメリカ・フランクフルト学派』（青木書店、1997年）と永井務監訳『アメリカ批判理論の現在——ベンヤミン、アドルノ、フロムを超えて』（こうち書房、2000年）である。前者は主としてハーバーマスの理論を基軸に、それとアメリカ批判理論内の論争を扱っており、後者はフランクフルト学派第一世代のアドルノやフロム、美学を幅広く取り上げている。両者ともに、ジェイが、アメリカ批判理論の研究者の最先端の研究を集成したものである。本書はそれに次ぐ第三弾であり、ほぼ20年の月日を超えて、それらの方向性を継承しつつ、最新の研究を踏まえてヴァージョンアップを図ったものである。

本書の第三の特徴としては、アメリカ批判理論からの新自由主義に対する批判的応答をテーマとしていることである。これは、日暮が基本的アイデアを出しジェイがそれに対応する諸論文をピックアップすることでなされた。21世紀に入り、新自由主義が世界を席卷しているなかで、アメリカ批判理論はどのようにそれを分析し対応を模索しているのだろうか。それが、2018年秋学期にパークレーに研究員として滞在した日暮がジェイに示した問いであり、それに対する答えとして編まれたのが本書である。本書を手にするれば、実は、新自由主義批判は、アメリカ批判理論のなかでは、経済的再分配の問題から始まりながら、「権威主義」というアメリカに深く巣食う政治・社会文化の問題として展開されるに至っていることが明らかになる。そのとき、フランクフルト学派第一世代のアドルノ、マルクーゼ、フロム等の思想的布置連関も新たな生命を吹き込まれるのである。

本書の第四の特徴は、2021年現在のアメリカ批判理論の研究者の論文を広く取り上げていることである。そこでは、ジェイやN. フレイザーのように主としてハーバーマスの影響下に思考した者と、W. ブラウン、P. ゴードン、M. ペンスキーのように、フーコーやフランスポストモダン思想やアドルノの影響下に思考した者との両方の潮流が含まれている。この両潮流は、アメリカ批判理論をそれぞれ代表するものであり、アメリカ批判理論の歴史は

この両潮流の論争のなかで形成された、と言ってよかろう。本書は、その意味で、アメリカ批判理論の総決算を示すものである。

まずジェイの本書序文を検討することによって、本書の基本線を探ってみよう。ジェイは序文を、フランクフルト学派から受け継がれたものがいわゆる「新自由主義」を検討するのに役立たないのではないか、という懐疑から始めている。つまり、フランクフルト学派の理論は大げさではあるが既に時流に合わずその批判力も衰退しているのではないか、という疑いである。そこで分析の補助線となっているのが、Fr. ポロックの「国家資本主義」論である。それは、第二次大戦前に国家権力が独占資本と融合する様を取り上げている。

しかしジェイは、このような分析が、1970年代の新自由主義の登場によって古臭いものとなったと考える。ジェイは当時から現在に至る新自由主義による経済的変化として、市場原理主義の浸透、労働・金融等におけるさまざまな規制緩和、国営企業の民営化、社会保障費支出の削減、貧富の差の拡大、金融資本のグローバルな成長、ヘッジ・ファンドやデリバティブなどの金融商品の登場等をあげている。

新自由主義の実態は、国家の機能を縮小させ個人の自由を最大限に実現するという、新自由主義者の夢の実現ではなかった。つまり、彼らの言うユートピアは結果として、中流階級の没落、貧富の格差を生み出し、分断を前景化することになった。この一連の流れは、新自由主義の実現が社会格差・社会分断を生み出し、その結果それに対する反応として、ポピュリズム的権威主義を呼び起こしたことで捉えられる。ジェイによれば、トランプ大統領の登場は、アメリカ批判理論に、自らの重要性を再考させるほどのショックを与えた、という。この再考の中で、フランクフルト学派の理論は「新自由主義の危機と、それから生じたと思われる新しいポピュリズム的権威主義とを理解しようとする試み」の中で再生を経験することになったという。も

ととも、批判理論は、自由主義がその反対物である権威主義に転化することに照準を合わせた理論であった。本書の諸論考は、さまざまな視角からその試みを解明しようとするものである。つまり、本書におけるアメリカ批判理論の課題は、まさに新自由主義と権威主義とを克服する新たな理論的方向性を指し示すことに他ならないのである。

本シンポジウムは、以下の三つの報告からなっていた。

日暮雅夫（立命館大学）「新自由主義と権威主義とを克服するもの——ジェイ、ブラウン、フレイザー」

青柳雅文（立命館大学）「『文化産業』論再考——トランプ時代におけるアドルノの思想の意義——」

百木漠（関西大学）「『第二の自然』としての市場——アドルノの自然史から経済学史を読む」

日暮の報告は、『アメリカ批判理論』所収のマーティン・E. ジェイ「第3章、新自由主義的想像力と、理性の空間」、ウェンディ・ブラウン「第4章、新自由主義のフランケンシュタイン」、ナンシー・フレイザー「第2章、進歩的新自由主義からトランプへ——そしてそれを超えて」を取り上げ、新自由主義がそのディストピア的状况から権威主義を生み出したこと、それに対抗する可能性について論じている。

青柳の報告は、ピーター・E・ゴードン「第5章 権威主義的パーソナリティ再訪」を扱い、トランプ時代の新自由主義の帰結をアドルノの「文化産業」論から読み解き、アドルノの思想の今日的意義を問い直すものである。そこでは、トランプ主義において人間もまた規格化され、空虚な存在となっており、トランプ主義は、まさにアドルノの言う文化産業と同様の構造を

持っていることが明らかにされる。

百木の報告は、チャールズ・プリュシック「第1章 新自由主義」を取り上げ、アドルノの自然史と歴史の対比、物象化論を梃子に、新自由主義を分析しようとするものである。その際、市場が「自然的な運命」として現れてくる現象、正確に言えば、経済学者たちが市場を「自然なもの」として表象しようとする現象を、アドルノの自然史の理念を用いて批判しようとする。つまり、自然史の理念を経済学批判に応用するのである。

本シンポジウムは、以上の三報告によって『アメリカ批判理論』が問いかけた課題を明らかにしようとする。この小特集では、以上の報告から、青柳と百木の論考を掲載する。

注

- 1) 本稿は、『アメリカ批判理論』の「解題 新自由主義から権威主義の時代へ」を改稿した。
- 2) マーティン・ジェイ／日暮雅夫「〈インタビュー〉アメリカ批判理論の発展と今日の課題——マーティン・ジェイに聞く——」（『思想』2020年第5号、第1153号、岩波書店、87-99頁）参照。

立命館大学産業社会学部教授

日暮 雅夫

